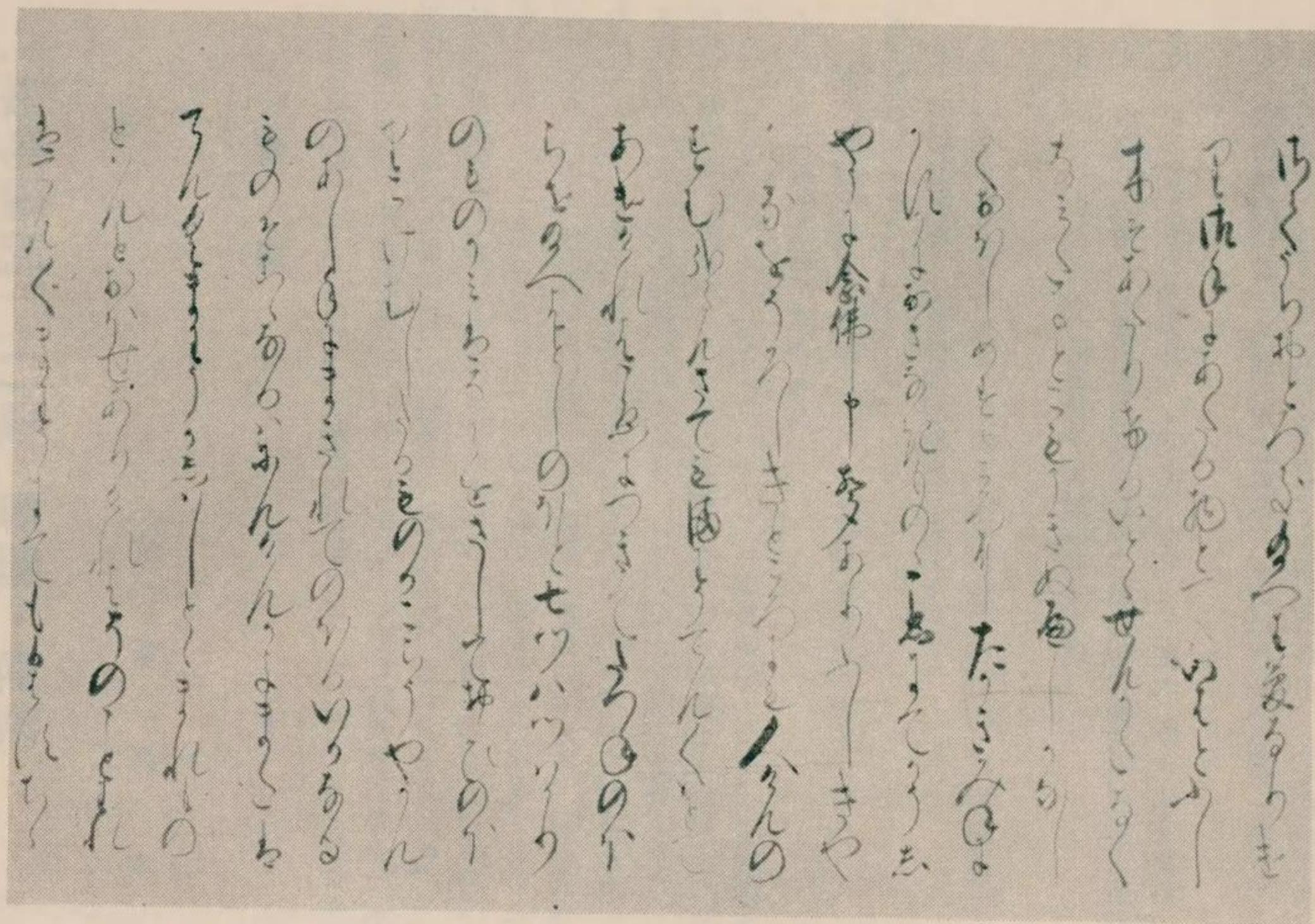




泥及び青色で山水花鳥模様の下絵を描いた鳥の子紙を使っている。縦三センチ、横一六・五センチ。外題は、「嚴嶋明神縁記」と、表紙左上方に墨書、本文の筆とは異なっている。内題は「嚴嶋大明神御縁記」とあり、本文と同筆である。表紙は薄茶地の紙表紙。袋綴で、遊紙はなく、墨付五七丁。一面八行書き。最初及び最終丁に、「石橋利三郎」の蔵書印があり、見返しに、小さく墨で龍頭が描かれている。旧蔵者石橋利三郎については不明。奥書はないが、近世中・末期頃の本かと見られる。文字は達筆とは申せない。

写本、一冊。内容を上下に分けず一つづきにしている。縦二二・四センチ、横一六・五センチ。外題は、「嚴嶋明神縁記」と、表紙左上方に墨書、本文の筆とは異なっている。内題は「嚴嶋大明神御縁記」とあり、本文と同筆である。表紙は薄茶地の紙表紙。袋綴で、遊紙はなく、墨付五七丁。一面八行書き。最初及び最終丁に、「石橋利三郎」の蔵書印があり、見返しに、小さく墨で龍頭が描かれている。旧蔵者石橋利三郎については不明。奥書はないが、近世中・末期頃の本かと見られる。文字は達筆とは申せない。

嚴嶋大明神御縁記

稲賀敬二先生蔵

ここに、稲賀本・慶大本の近親性が認められる。しかしながら、すでに述べたように、巻末に清盛奉納の件を記す点、及び文章全体の語句の異同の観点からは、この稲賀本の本文は、類従本に最も近いと考えられるのである。この本の本文系統については、他日更に立ち入って考察したい。

翻刻にあたっては、旧漢字を新字体に改めた。濁点表記は本のままである。ただし、読点は、先行の翻刻にならって私につけ、段落わけもこれに準じた。（「いつく嶋」の翻刻については、大学院博士課程前期学生竹村信二君の協力を得た。）

には、類従本と元和本とをあげて、稲賀本と比較し、更に慶大本のその箇所をあげておく。

さてもくはげんすぎければ、御くちずさみありけるを。或人がききとがめ。大里へまいり。大わうへ申奉るが。いかにや大王きこしめし。せんざい王の御のうは。べつの御事にてまします。こよひくはんがくありつるに。山ほととぎす雲井はるかに二声三声音づれて候へければ。御くちずさみありけるを。まさしくこひの御やまひとおほへ候と申たりければ

（類従本）

さてもくわんげんも過ければ、御くちずさみありつるを、あるしんか聞かどめまひらせ、大りへまいり、父大王に申奉るは、いかにや大王聞めせ、善哉王の御のふ、別の御事にてまします、今夜くわんげんの候つるに、山ほととぎす、雲井はるかに、二こゑ三声おとつれ行に、御口ずさみの候つるは、まさしき恋の御やまひと、おほへ候と申たりければ

（元和本）

さてもくわんげんすぎければ、御くちずさみ候つるを、あるしんかきかどめまいらせ、大りへ参り、大王に申ける、いかにやきこしよ、せんざいわうの御なうは、別の事にてまします、こよひくわんかくの候けるに、御くちずさみ候つるあひだ、まさしく恋の御やまひと、おほへ候と申たりければ

（稲賀本）

くわけん、過ぬれば、御くちずさみを、める人、これを聞とめ、大りへまいり、大わうに、此よし、そもんするやうは、こよひ、くわんがくのおわりに、御くちずさみ、聞奉れば、まさしく、恋の御やまひと、おほへ候と、申たりければ

（慶大本）

すなわち、稲賀本・慶大本は、共通して時鳥のくだりを落している。

さてうちおとろき給へは夢なりけり御ねにあたる物とてはいはとふし木ぞあたりけるいとせんかたなくなみたにともうきぬへしかなしくおほしめすところにたかきみねにかすかにおさなきものゝこゑにてかうしやうに念仏申声ありふしきやかゝるをそろしきところにも人けんのすむ哉らんさてもまわうてんくはとてあけければこゑにつきてたつねのほらせ給へはとしのほと七つ八つばかりのものかみはそらをさしておひのほりこけむしたるものかこらうやかなのあし手にまされてのほるいかなるものそこゝなるはにんけんかよまたはてんくまわうかしはしとまれものとはんとおほせありければそのことわれはてんぐまわうにても候はずちゝをはとうしやうこくのせんさいわう母をはさいしやうこくのあしひきのみやと申ちゝせんさいわうきまんこくへの御るすに千人のきさきたちにむつかしきむしつをゆいつづられてわれをはらにもたせたまひ七月と申にはものゝふのてにかかりこの山にてうしなひたてまつるときにしはしものゝふにいとまをこひ給ひ

一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七

てわれをうみたまふこの十二ねんのあひたこの山のこらうやかにやしなはれて春秋をおくり侍ると申給へは父せんさいわうきこしめしわれこそなんちかちゝよこれへまいり候へとありしかはやうゝちかつきおはします御ひさのうへへとありければむまれてこのかたゑしきけんふのにほひをもしらすいかてかちゝと申なから十せんのわうをはけがし申へきかとありければたにゝくたり給ひそくしんじやう仏の水にてわうしをすゝききよめをきせたまひて御ぐしをかきなて涙にむせひたへいらせたまひやうゝしはしありてかくかたみのありつることよとていにしへの御物かたりくはしくかたりたまひさてはゝのこつはいつくにあるそとおほせければあるいはのはさまにゆひをさしとりいたしたてまつるせんさいわうはこつを御らんし給ふにつけてもつらさのみ御なみたいま一しほこそまさりけるさてきさきの御つけにまかせわうしとひきくしたてまつりかいらいこくすいしやうのむろをたつね給ひてゆかせ給ふほとに九十日と申にはをとにきくかいらいこくすいしやうのむろへつき給ひて物申さんとありければたそや

二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六

このいわやへきたりたるは人けんのかよふところにてもなきにとてたちいて給ふをみたてまつればかうのけふりにふすばりひたひにはくるはかみをひたるひしりたち出ていかなる人そとひたまふわれはどうしやう国のあるしせんさい王と申ものなりつまの后はかなく成候をなく所に夢のつげにこつをもちこの岩屋へ尋まいりもとの姿にをこないすまして給り候へと申せとつげの候へはつげにまかせたつねまいり候と申給へは

そのとき上人うちへいらせ給へとていわやのうちへしやうしいれたてまつるさていかほとになり給ふそとゝい給へははや十二年になり候と申たまへはさてはかなひ候まし一年二年のあひたこそやすく候へせめては五ねん六年にてもあらはこそはや十二ねんにて候はゝおもひもよらすとおほせありければあまりに御なけきありければ又おほせらるゝやうはたゝしをこなひ候へし百三十日にいまたみたれ候それもおなし御なけきに候とありければせんさいわうのたまふやうはこひしき人を夢にみてたにもなくさみ候ましてや百三十日なかきちきりにて候とよろこひ給ふさて

五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四

しゝたる人一年は一七日二年なれば二七日をこなひ候かこれははや十二年にて候へは二百日をこなひ申へしとてこかねのいたにこかねむしろをしき大なるこつちいさきこつちらさすならへ給へは御くひのほねなかりけりこれはいかにせんたとありければまたひしりはつるきをとり出しもたせたまつりてとうしやうこくへやり給ふとうしやうこくへゆきつき給ひてわうしはとうせんわうに此よしゝ申給へ共夢にもしらすと仰けれ共おやのかたきの御事なればとてわうしのつるきをぬいてふり給へは千人の後のくひは一度にはらりとをちにけりその中に一人のきさきの御くひをちたまはすこれはすなわちせんさいわうの御母なりわうしあひ奉りてくはしくたつね給へはみなみのはなそのよりのりのはをとりいたしその中より御くひをとり出しわうじにわたし給へは御手を合てうけとりおかみ給ひてやかてかいらいこくへぞとひ給ふさても御こつをそろへならへ給ひてきぬをひきかつけたんをこしらへほつろていきうしかんたんをししたまひてをこなひたまふ日数かさなり給へはあまりの御ゆかしさに二百日をこなひ給ふへき

八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇 一〇一 一〇二 一〇三 一〇四 一〇五 一〇六 一〇七 一〇八 一〇九 一一〇 一一一 一二二

をまぢかね給ひて百九十七日と申には
うへのきぬひきのけてみたまへはもと
の御すかたにすこしもかはり給はす
そんひんとして御くしはかたのまはり
にほうくをひかり給ひつるをくし
をこしたてまつるころは九月十四日
の夜うしのときとかやさてません
さいわうなのめならすよろこひ給ひて
大王后諸共に古の御物語共語おはしまし
てたかひに御涙にむせひ給ひけるそゝろに
哀そまさりける

さても大わうはみねにあかりてたき木
をこり給へはきさきわうしもろとも
にたにの水をむすひ御ひしりの御お
むををくり給ふそのとき上人のた
まふやうはこの国にはほんふのたや
すくすむせかいにても候はすしんつ
うのとふくるまにのせかへり給ふへし
とありければせんさいわうきさきよ
ろこひ給ひて御くるまにめされける
とひしり御まはりより三つのけんを
とり出しこのけんのとゝまらんと
ころをすみかとさため給へとてみなみ
にむかつてなけ給へは一つはりうく
うしやうどにとゝまり一つはしやう
らいこくへとひ給ふあらためて大りを
つくりいたてまつるしはしますま
まふところとせんさいわういかゝをは

一一三
一一四
一一五
一一六
一一七
一一八
一一九
一二〇
一二一
一二二
一二三
一二四
一二五
一二六
一二七
一二八
一二九
一三〇
一三一
一三二
一三三
一三四
一三五
一三六
一三七
一三八
一三九
一四〇

しめしけんきさきの御いもうとに
おもひつきたまひてもとのきさきの
御事をつきになし給ひけりさても
きさきはこれをうらみ給ひてかのく
るまにめしてとひ給ふほとに日本
あきつ嶋いよの国いしつちのみねに
はしめてをちつき給ふこのみねには
もとはいわつかさのこんけんすみたまふ
なれはあるへからすとてあきのくにさ
いのこうりかわいむらといふところにお
ちつき給ふになにはのきやうはりま
の国いなみのにしか有このしかのなく
こゑをきく人みなたましゐをけす
又すいごてんわうのちよくちやうとして
いかにしてもこの鹿ををひとりてま
いらすへきよしせんしなりかの国の
ちう人さいきのくらもとにおほせくたさ
れけりくらもとゐんせんをうけたま
はりてこれていひのものをはたゝよ
のつねのゆみやにてはかなひ候まし
とていなはのくに大とりののかうりへ
ゆきてかねのゆみをつくりまたこの
くにへくたりつゝかのしかをねらふ
ほとに
三日と申にかのしかをおひとりていわう
へたてまつるそのしかけいろつねの鹿
のけにてあらず日月しやうしゆくの
なしあさやかにしてけいろさながら

一四一
一四二
一四三
一四四
一四五
一四六
一四七
一四八
一四九
一五〇
一五一
一五二
一五三
一五四
一五五
一五六
一五七
一五八
一五九
一六〇
一六一
一六二
一六三
一六四
一六五
一六六
一六七
一六八

こんしきなりていわうこれをゑい覽
あつてゐんせんにかきむかし九しき
の鹿ありすなはちこんしやなりい
きながらとりてまいらせすしてしき
にせつかいもつたひなしたとへよのつ
ねのしかなりともこんしやをかいする
は大せいのつみななるへしとてくらもと
をはあきのくにとすわうのくにのさか
いに大たきといふところになかさけり
せめてのこととたゝかねこまををして
おんかのしまのあたりすつところ
にゝしよりくれなるあのはかけたる
ふねきたるちかくなるを見ればこん
こんるりのとまの中にまことにけた
かきびちよ一人をはしますそのとき
くらもと申はいかなるくにのいかなる
人にてましますとそ申ける美女
こたへてのたまはく

我はこれなんてんちくのさかいとうし
やうこくてんにちわうのひめみやなり
日本国あきの国にきたる事はわうじ
やうにちかつきしゆじやうさいとのため
なりわれすてにうへのそめりさ
うくくごをまいらせよとありければ
くらもとなにをまいらせんと申せはこ
めをうしほにてあらひまいらせよと
おほせけるさらはとてくろますの
しまにふねをよせくしをとりてま

一六九
一七〇
一七一
一七二
一七三
一七四
一七五
一七六
一七七
一七八
一七九
一八〇
一八一
一八二
一八三
一八四
一八五
一八六
一八七
一八八
一八九
一九〇
一九一
一九二
一九三
一九四
一九五
一九六

いり候とてその御かすはいかほとと申
せは大みやはひたり八つ右九つ中は
十六とおほせけりさてはとて三十三
せんそなへたてまつるさてかのくら
ますのしまを御覽しててんちくの
をかのしまにもさもにたりとてたき
のくらみかさのほまのあとをたれた
まふかの御ほうてんならひに百八の
くはいらうをたて給ふいまたこれほ
との嶋をみす候とていつくしきしま
なりとおほせあるによつてこそいつく
しまとはそれより申はしめけり御
たくせんによりまつおりとのをはし
めてたちいれたてまつる大御せんと
申なりあしひきのみやの御ことなり
御ほん地はたいそうかいの大にちなり
また跡よりせんさいわう御たつねさ
せ給ひていらせ給へはきやくしん御入候
とおほせあるによつてこそまろうとの
御せんと申なりせんさいわうの御こと
なり御ほん地はびしやもんでんにて
をはしますたきの御せんと申たてま
つるはからひくせんのわうしの御こと
なり御ほん地せんしゆくわんおんに
てをはしますひしりの御せんとは
かいらいこくの上人の御ことなりほんち
はふとうめうわうなりあらゑひすと
申はしまのあん内申たるくらもと
の御事なりはやたの御せんと申

一九七
一九八
一九九
二〇〇
二〇一
二〇二
二〇三
二〇四
二〇五
二〇六
二〇七
二〇八
二〇九
二一〇
二一一
二一二
二一三
二一四
二一五
二一六
二一七
二一八
二一九
二二〇
二二一
二二二
二二三
二二四
二二五

はさいしやうこくへ文もちてつかひし
たる五からすのことなりかるのみやと
申は千人の中になさけあるきさき
せんさいわうの御母きさきの御事也
さても御まつりを三月十五日九月
十四日なりければほうしやうゑをたて
給ふことそのいはれなり御くひきられ
給ふ日は三月十五日又かいらいこくにて
いのりかへし給ふ日は九月十四日なり
ければそれによつて二きの御ほうゑ
を御ついせんとは申なり六月十七日
にくはんけんおこなひ給ふはとうしや
うこくにてせんさいわう恋にをもらせ
給ひしときなくさめたてまつるい
はれとかやいつくしまにしかをちかつけ
給ふことからひくせんにて十二年のあ
ひたわうじをやしなひしゆこしたて
まつるゆへに御むつましくおほしめ
してかせぎをちかつけ給ふなり御
まへに数千さうのふねをうかへ給ふ也
大せんにんのみなしこをさいどの御
くはんなりされはしゝたる人をもとの
ことくにおこないかへして候へは百三十日
にみたるゝとは申せとも五年と申五月
五日むまのこくにさゝいのかうりかわい
村よつて地の御せんの御まつり五月
五日にありさんのいみは七十五日しゝ
たるいみは百日なりとさためたまふ
そのいはれなり鹿をかいせんものには

二二六
二二七
二二八
二二九
二三〇
二三一
二三二
二三三
二三四
二三五
二三六
二三七
二三八
二三九
二四〇
二四一
二四二
二四三
二四四
二四五
二四六
二四七
二四八
二四九
二五〇
二五一
二五二
二五三
二五四

はたひをあたへへからすこのしま三
へんほうしゆち七ふくちうまんのとこ
ろなるへしさんけんしやうとのによ
いくはうみやうそうもくをいたゝきほんか
くせうちうの月はなみまのあひた
にかけをうかへ大ち大ひの水は八ほう
のたにゝみつたきの宮のいぬいのすみ
ちかけれはしゆふくのたつみともいへ
りくはんとうのみふつなりその
ときしんこんをかうけとしてつねに
この嶋にきたるへしとてみつけん
のいわやこれなりこれはひるしやな
きやうをたつし給ふとうしやうなり
なんてんのせんくのすみのかたち也
三しゆのほたひをたすけ三みつほう
をふくせんとありそのときくらもと
この御事をうけ給はりてきいのおも
ひをなしてそてをしほりて申さく
われらいやしきことをはてんをもつ
てかみにさうもん申候はんはいかなるへ
しと申されければ御たくせんにいは
くわうじやうのうしとらのすみきやく
しんしやういて給ふことあるへした
つねおとろきあやしみ給ふへし
そのみんせんにこのよしさうもん申へ
しそのとき五からすをほくあつまるへ
しと御たくせんあるによつてくらもとわ
うじやうへのほり此よしさうもん申お
なしくからすさかきの枝をくはへて大

二五五
二五六
二五七
二五八
二五九
二六〇
二六一
二六二
二六三
二六四
二六五
二六六
二六七
二六八
二六九
二七〇
二七一
二七二
二七三
二七四
二七五
二七六
二七七
二七八
二七九
二八〇
二八一
二八二
二八三

りへまいる又是か申ごとくにてんべんの
ほしいて給ひつるゆへに大きにおと
ろきましますようゝの御いのりと
うのあるにくらもとうちう弁になさる
る御くうてん百八十てうの御しゆりの
そま山とう御きしんのせんし同し
きとし十二月廿一日御ほうてんにお
さめたてまつる明年の二月に初め申て
ほうゑのさくちをはしめさか木をとへ
いとしからすをししやとさため給ふ也
かのすいてんわうのせんしの御し
やうにいはいくあきのくにいつくしま
大明神御くうてん百八てういまよ
りのちとうこくは八人のこくしかの
ふくてんをそへたてまつるへしきや
うしのしけんさらにかみのくらしいを
かるしめしやけをわつらはかすこれま
つたいによりて御やしろはいてんとう
のときはとうこくのこくしくはんさうを
へたてこくちうさいもくひわたをかねて
みやこへほんそうすへからすほうしん
をあらためんときはしんゝをつくし
て百日百夜けつさいしてにしきを
もつて手をまきそのうへをにしき
をもつて御つゝみをもてをかくし
せんめをたれて百日のあひた日々
に御きうしるときそのいてよくよ
く五かいをたもつてつゝしんで御
たくせんにしたかひてしうしんをつ

二八四
二八五
二八六
二八七
二八八
二八九
二九〇
二九一
二九二
二九三
二九四
二九五
二九六
二九七
二九八
二九九
三〇〇
三〇一
三〇二
三〇三
三〇四
三〇五
三〇六
三〇七
三〇八
三〇九
三一〇
三一一
三一二

とめたてまつるへしうやまつて申さ
くのみくたんのとしたんしやう五年
きのへさる十二月三日うちうへんにおさ
めあきの国いつくしま大明神御
ほうてんにおさめたてまつるへしき
れは大明神のちかはせ給ふはわれ
をねんするしゆじやうにはかうせんふつ
きしそんはんしやううたかひあるへ
からすもしぶしんじんのしゆしやう
はしそんはか。らすたへはてその身はす
なはちわるくなるへしとちかはせお
はしまししやうじんのへんさい天
とけんじ給ふ一さいしゆしやうの
しよぐはんなんそまんそくせざらん
しよ仏のほん地まちゝなれともあく
まをはらい仏法をしゆごし給ふこ
そたもんのふくてんすくれたれとて
いつくしま大明神とあらはれ給ふ
なりこのほん地日ことによみたて
まつれは千たひ御まへにさんけい
したまふよりもまさるへしとの御
せいぐはんなりほうけん二年三月十
六日に清盛のいつくしまをおほし
めしたち治承元年にこのゑんぎ
をおさめ給ふ也

三三三
三三四
三三五
三三六
三三七
三三八
三三九
三三〇
三三一
三三二
三三三
三三四
三三五
三三六
三三七

そも、いつくしま大明神と申奉るは、我朝すいこ天王の御宇、たなし
 やう五年、きのえさる、十一月十三日、日本あきつしま、せんやうた
 う、あきの国、篠井の郡、十かけの村に、衆生さいとのために跡をたれ
 たまふ、かの大明神の御はんちを、くはしく尋ね奉るに、むかしてんち
 くに、十六の大国、五百の中国、(一才) 十せんの小国、むりやうのそ
 くさんこくのその中に、一ツの国あり、其国の名をとうしやう国となつ
 けらるゝなり、一人の王をはします、御名をはとうせん王とぞ申ける、
 又天笠のならひにて、千人のきさきまします、此君たいりをたて給ひ
 て、一人つゝ日をかゝさす、みゆきならせましますに、三月申しゆんの
 比にや、なんてんに出給ひ、四方のけしきを(一ウ) ぐわんしますに、
 しやくせんたんの木のえたに、つばさすをかけたるを御らんして、あは
 れなる事かな、むまれて七十よ月別てのちは、おなしはちすをならへ生
 れぬれと、おやこのたぐひをしらす、いはんや丸は、大国の王子にて、
 一人の王子なかるらんと、仏神にいのり給ふけるに、一人のきさきくわ
 いにんならせたまふ、月のかすつもあり、御たんじやうあり、王子にて
 (二才) そまします、すてに七さいにて御くらゐにつき給ふ、御名を
 はせんさい王とぞ申ける、十三と申には、大国のならひにて、まづ百人
 のきさきを、そなへ奉るへきせんじあり
 又このきみに、八十二代伝りたる御たからあり、別の物にてあらず、扇
 にてそさふらひける、三つの糸をそかきたりける、一つには、ゐなから
 さんせむせかい、目のまへに書、ひとつには、こんていのほけきやう
 をうつしかく、一つには、(ニウ) 天下のめめよき女房をかきうつし
 たり、此あふきを、大王御手をはなち給ふ事なし、何としてか、しはら
 く御手をはなち給ひて、をかせ給ひけん、せんさい王とり給ひて、たゝ
 一め御らんしければ、まことにいつくし事かきりなくおほしめし、はや
 く位をうけとりて、この扇を我まゝにせはやと、おほしめしけり、さ
 て、此あふきのなかのゑ女房、御心にかゝり、御なう(三才) とならせ

ふ、折ふし卯月はしめ、山ほとゝきすの雲井はるかにをとなつれけは歌、
 五月やみ、をとつて行、ほととぎす、こゑするまゝに、うゑなきかせ
 そ、かやうになけかせたまへは、五てう見たてまつり、又御せんまい
 りて申けるは、さあらは御玉つさをあそはしたまへと申ければ、せんさ
 いわう、なんち我に(六才) 第一のたからなり、いかゝあるへきとおほ
 せられければ、かやうの御大事に、君に命を奉るも同じ御事なり、十二
 ねんのあひだせつな事なり、たのもしくまちたまへ、いそぎ御玉つさ
 をあそはし給ふへしと申せば、なめならす御よろこひおはしまして、
 こうろきのすみすりなかし、筆をそめ、くれなゐのたんしひきかさね
 (六ウ)

ゆめにたにまた見ぬ人のこひしきは、むまれぬさきのちきりなりけり
 ゆくすゑしらすとあそはし、五てうにたまはりけり、ひたりのはがい
 におさめ、御せんをたちぬ
 さてかのたびにおもむき、とひゆくほとに、かいしやうまんゝとし
 て、雲のなみ、けふりの浪をしき、ひるは日の入かたをにしと思ひ、
 よるは四さうのほしをめにかけて、あけくれとびゆ(七才) くほとに、
 みちを出て五十四日と申に、にしよりふきくるかせはけしくて、はかい
 もさかり、身もつかれ、こゝろもよはくなりければ、我はこれ、とうし
 やうこくのせんさいわうの御つかひなり、いかてかせんしをむなしく、
 此かいていにしつめ、もくづとなすへきや、やすむへきたよりをあたへ
 てたべ、りうしんと、よはゝりけり、りうじんもあはれにおもひ、まん
 こうのとしつもありたる、竜うきあかり、しまとなりて、五鳥羽を(七
 ウ) やすめて、こけをむしりてうゑをやすめ、又とひゆくほとに、八十
 五日と申に、さいしやうこくにつきにけり
 さても天一王のたいりへ参り、はなそのに三日あそひけり、三日と申
 さうてうに、なみのかすと申女房これを見、あしひきの宮へ申やうは、
 また見ならはぬうつくしき鳥はなそのにあそひ候と申、(八才) ひめみ
 やみすうちあけさせ御らんし、これやこの、ほとけの国にありときく、
 くじやくあふむ、かれうびん、きんしゆてうとは、これやらんとおほせ

給ふ事、すてに日かず積りければ、たいりのうちのさはぎとなり、大王
 もきこしめし、おほきになけかせたまふ、なに事にてわたらせ給ふにや
 と、せんしありければ、これは扇の中の、ゑ女はうをうはのそらにこひ
 給ふ、人しらす、さてしも日かすきさせ給へば、いよゝゝおもくなり
 給ふ、くぎやうてんしやう人常に参、くわんかくをはしめ、なくさめ奉
 り、さ(三ウ) さてもくわんけんすきければ、御くちすさひ候つるを、
 あるしんかき、かとめまいらせ、大りへ参り、大王に申ける、いかにや
 きこしよ、せんさいわうの御なうは、別の事にてはまします、こよひ
 くわんかくの候けるに、御くちすさひ候つるあひだ、まさしく恋の御や
 まひと、おほへ候と申たりければ、大王きこしめし、やすき御事なり、
 たとひたいりの、千人の後のうちにてわたらせ候へしと、せんじありけれ
 ば、これは扇の糸をこひ給へは、御返しなし、さるほとに、あるしんか
 申奉るは、さても此扇の絵女房と申奉るは、むかしのひしやもん天王の
 御いもうと、きちしやう天女と申人を、うつしかきつるとかや、うけた
 まはる、それはいにしへの事、いまはなのみのこりてぬしはなし、思ひ
 とゝまりた(四ウ) まへ、さても、これよりにしに国あり、其国の王の
 御名を、天一わうと申、三ばんにあたり給ふひめ宮と申こそ、天下第
 一の女房とは申候へと、かたり奉る

さても御なう、かきりと見えたまへは、又君に八十二代つたはりつる御
 たからに、つばさのさふらひけるは、かしらはしろく、羽はくろく、其
 身はあをし、ははあかし、おはきなり、五色の鳥なれば、五てうとはな
 つたたり、さ(五才) ても、せんさいわうの御まへに、かの鳥参り申け
 るは、いかにや君きこしめせ、何をかさのみなけかせましますぞ、抑か
 のさしやうこくの道は、六ねんに、ゆきかへり十二年、思へはやすき間
 なり、さりながら、此みちはかいしやうまんゝとしたる所なり、一所
 にてもやすむへきたよりなし、我さかりなる時ならば、なとか御つかひ
 申さざらんや、そのうへは、われは御身第一のたからなり、わ(五ウ)
 れうせなは、君の御大事なりと申ければ、いよゝゝ御なけきとなり給

ありければ、五てう、文を御まへにおとし奉る、ひめ宮、何となくとり
 あけ御らんしければ、なんえんふたい天下にまします、せんさいわうの
 御玉章なり、なかゝ御返ししたりとも、此世のちきりあるへから(八
 ウ) すとありければ、又ある女房たち申されけるは、哥の御返しなけれ
 は、七度くちなきむしとむまれぬと申ければ、御返哥あり
 ますかゝみかけ見るからにあこかれて、我身もそらになりぬへきかな
 とあそはし、又五てうにつけたまへは、御まへをたちのき、さきの岩の
 こけ、葉となり、ちからもつきす、百七十日と申に、とうしやう国へそ
 帰りける

せんさいわうに御返事奉る、なの(九才) めならすよろこひ給ひて、御
 ゑいらんあるに、まことにうつしき文字のならひもなつかしくしま
 す、いま一しほの御おもひましたまへは、たゝあふよりほかの葉なし、
 いよいよ御なうはおもくならせ給へは、秋の御ゆめに、千人の大王を
 しよせ、くわの木千本きりよせ、本きりのふとぎにては、くせいのふね
 をつくり、すゑのは(九ウ) そきにては、しひの車をつくり給ひて、車
 には天王めされて、五てうはなかにまいりたまは、船も車も、万里
 をとぶべしと御覽し給へは、せんさい王のめならすよろこびたまひ
 て、千人の大王をめしよせ、千本のくはの木をきりよせ、ほとなくくせ
 いのふね、じひの車をつくり、舟にはくきやうしんかをのせ、車には
 天王めされて、又五鳥かなえに参り、はるかにな(一〇才) みちをこきた
 まへは、百千万のいかつちおちかゝることく、なみ風のあらく吹けれ
 は、せんかたなくおほしめし、りうわうへ申たまへるやうは、われはこ
 れとうしやう国のあるしなり、諸仏もあくれひ給へとありければ、なみ
 風しかとしつまりて、舟も車もさいしやう国へそつきにける

さても天一王のひるねをめされける御ゆめに、御らんしける事こそふし
 きな(一〇ウ) れ、としのよはひ、廿はかりのじやうらうの、けんわうの
 おもひにうちしはれたるふせいにて、うちの柱によりかゝり、なみだぐ
 みたまたてわたらせたまふと御らんし、うちおとろき給へは、又めしつ

かはせ給ふしつめか、物につゐて天地にふして申けるは、いかにやわか君、かくうちとけてましまし候ぞ、東國ノ千歳王とうしやう国のせんさいわう、(一オ)此こそは、てんにまします足引の宮をこひかねて、たゝいまわたらせたまふなりと申せば、天王きこしめし、御むさうと、しつかたぐせん思か合て侍り、是は名たかき王ときこしめすとて、はしめてたいりをたて給ひて、宮この御まうけとりたまふところに、しつか申ことく、御もてなしかきりなし、此ほと御祈の御神樂七日、又御(一一ウ)もてなしかきりなし、はんげんすきければ、こすいてんへ御つかひ、御返事は、いま三年はかなひ候まし、三世の諸仏へ大くはんとありければ、大王きこしめし、あるまじき事なり、はるかにいらせ給ふ君を、いかてかさひしくをきまいらせ候へきとて、一日はかうしをへだて、二日はみすをへだて、三日は同じきちやうにわたらせたまふ、さても(一二オ)御ちきりあさからず、天にひよくの鳥、地にあらばれんりのえだ、神とならはむすぶの神、ほとけとならばあいせん明王とちきり給へは、三ねんのすくるはゆめなり

くぎやうしんか申されけるは、いかにやわか君、すてにとうしやう国を出給ひては、三ねん三月にはやなりぬ、とうしやうこくには、君御かへりなきとて天下のなけき、(一二ウ)国のさはきに候らん、あはれくわんぎよ有へしと申されける、ひめみやにはなれ奉りては、一時をもあるへからすと、せんしありければ、五てうまいり申やう、君は十せんまんしやうの御身にてまします、何ともなく候、御たばかりこぬそや、ひめみやをすかし参らせたまひ、君御くはんぎよあらは、さためてたひの御いのり(一三オ)のかくらとて、ないしところの御まつりとあるへし、そのまきれに、我國へわたりし時、乗て参りたる車のたくみをも候らしいへしと、御物かたりて、ひめみやの御手ニ、てをくみ車にのせまいらせたまは、くぎやうしんかも、しのひ出ふねニのり給ふべし、五てうなかえにまいるへしと申せば、其をもつともしかるへしとて、色々の(一三ウ)事に道すかし奉り、車に引のせまいらせ、舟もほとなく出せり、ひめみやはこすいてんを出て、をそくなり候、かへらんとしたま

へば、御車の物見をひらきて見給へは、かいしやうまんくたり、是を御らんして、こはいかに、我をはいつくへともなひてゆくらん、あはれひのおや、かなしひのはゝをふりすて、是はいかなる世の中そやと、(一四オ)たえ入こがれなき給ふ、せんさいわうのおほせには、あはれひのちゝとも、かなしひのはゝとも、我をたのみたまひ候へとて、色々すかしなくさめ奉る、はるかのみちをすぎたまふ、かの五てう、一羽あはけは、舟も車も万里をとぶかことく、日かずつもればはやとうしやう国へぞつきにける、やかてなんでんに御車の物見(一四ウ)うちあけ見給へは、さいしやう国は雲るはるかににけり、ひめみやなけきたまふに、ちからをよばず、我おや大王きさきのおほせには、いきてのけうやうには、一日に三度、我すかたを見せ奉れとおほせありつるに、ちゝはゝの御なけきをはいかてか、いかゝすへきと、天にあふきちにふしかなしひ給ふ、いまはなけくに(一五オ)かひなし、さてちゝ大王、はゝみやは、たびの空の御いのり、御かぐらはしめ給ふ、さるほとにとうしやう国の大わう、仰られけるは、千人のきさきたち、日をかゝさす、五十人つゝゆき給ひて、なくさめたまへとありければ、きさきたちゆきて見まいらせたまへは、まことにあたりもかゝやくはかりなり、御すかたをみれば、春のはな、(一五ウ)かたちを申せば、秋の月、十はらとおのゆびまでも、るりをのべたることくなり、さて、千人のきさきたち、よりあいておほせられけるは、此きさきを大わう御らんしては、我らほとはものゝかすならすなるへし、大王こらんせぬさきに、何として、失ひ奉り候はじやと、天にあふぎ、せんぎし給ふ事こそふしきなれ、さても(一六オ)御すかたをつくりあらはし、あかきころもをきせ、七尺にあなをほり、さかさまにうつみ、たけのたかきをんなをうみせけり、大わらはになし、時をつくりてのろひたまへれとも、とがなき人なれば、をひたまはず、その中に、せんさいわうのはゝ、我みめのわるき事は、せんせのつみふかきゆへなりとのたまへとも、千人のきさき、(一六ウ)同心にすゝめ申されければ、ちからなくしてそわしますさてもまかたこくとはらない国のさかに、ゆくかた五十ねん、すきしか

た五十年を、かゝみにかけて見るやうなる、はかせをめしておほせありけるは、我ら千人ことくそらむねをやむへし、その時まいりてうらなひ申へきよし、くはしくをしへふくみたまひて、千人のきさ(一七オ)きたち、一疋のきぬ、一兩の金を出して、きぬ千疋、こかね千兩、かのさう人にたまはる、昔もいまも、よくにまかせぬ物ぞなし、れうじやう申てかへりけり、きさきたち一度にむねをやみ給ふは、たいりのうち物さはかく成てけり、大わう大きにおとろき給ふ、千人のきさきたち申されけるは、またゝ国とはらない国のさかひに、まさし(一七ウ)きさう人の侍るとうけたまはる、めされてうらなはせたまへかしと申されければ、やかておんみやうしをそめされける、御たつねありければ、かねてこしたる事なれば、此御やまいは大事の御やまひなり、十二年三

ねんにはかならずみなすきさせ給ふへし、此御葉には、是よりきたに国あり、きまんこくとこれをいふ、おにのすむくになり、かたみち(一八オ)六年にゆきつくところなり、かの国に山あり、ちやう山と申侍る、かの山におふるやくし草と申草葉あり、これを鬼か第一のきうとす、是はたゝ人のとりたまはんは、薬になるへからず、せんさいわうとり給はんかくすりと成へしとそ、うらなひ申ける、大わうきこしめし、やかてせんさいわうへちよくしたち、よはせたまひ、はかせのうらなひを(一八ウ)をくわしく御物かたりあり、たゝいまの后一人のおもひに、千人のめいをかへさせ給へきかと、なけかせ給ふ、せんさいわう、かのきさきたちの御たくみをは夢にもしりたまはて、大王のちよくめいをそむきかたくして、りやうじやうし給ふ

さて我たいりへかへらせ給ひて、きさきに此よしかくとしたまへは(一九オ)

そのときさき、我すてにちゝはゝにとをくはなれ参らせ、御身一人ならで、たのむへき人もなし、我をはたれにあつて給ひて、出させ給ふそや、われをもともなひましませとありければ、せんさいわうより、此たひと申は、かたみち六ねんなり、鬼のすむところときく、よるひる心に

ひまもなし、思ひもよらざる事なり、きさきの国にはおにがせかいとうけたま(一九ウ)はる、かの薬をはみめよきおこ千人にかはりてとると承る、御身参人しては、かなひ給ふへからず、鬼国より帰り給ふ事ありかたしとて、かなしひこかれおはします、さて大わうのせんしなれば、そむきかたかくおほしめし、十二ねんのゆきかへりをおもへば、それもほとあらし、かならずまちたまへ、やかて帰り見まいらせんと、御心つく出(二〇オ)させ給ふは、きさきなみたにむせひて

かへるともかひもあらしなみなみの たちなんのちやきみを見るへき

とふしまろひ給へは、せんさいわう、かへし

今こんと思ひて出るわかれたに かなしかるへきけさのあけぼの

とあそはしてぞ、きやうかうならせ給ふひける

さても千人のきさきたち、なめ(二〇ウ)ならすそよろこひ給ふて、あさか山と申わらはをかたらひて、かすのこそをとらせ、せんさい王のたいりへ参りて、此うたをゑいじてありくへきよしをしへ給ふ

あさかやまひかりさやけき玉のゐに しはしのかけをやとせひめみや此わらんへともしらす、千人のきさきをしへのことく、かのあし引の、なけきしつみ(二一オ)給ふたいりへ参りて、つねに此うたをえいしけり、さて千人のきさき引つれてたいりへ参りて、おほせられけるやうは、女ほとはかなきつたなきものはなし、きのふまではせんさいわうのすみ給ふたいりへ、あさか山を入て、ふみけたまふと申されければ、大わう御返事に、あるまじき事かな、ちゝはゝをこきやうにふりすてゝ、一人たのみ給ふは、ことはりなり、五十人三十人つゝも、よりあひなく(二二ウ)さめ奉る事はなくして、けつくしんしつなきことを、いひつけ給ふ物かなとおほせられければ、ほいなけにをのゝかへり給ふ

さていかゝすへきとて、あらけなきものゝふ、六人かたらひ、色々のこそをたまはりての給ふひけるは、さてせんさいわうのきさきは、大わうのふすまのせんしをうけたまわりて、これよりにしにはつかぢゆき

て、深山あり、からひくせんとこ(二二オ)れをいふ、その山にきんたふかみね、しやくまくのいはと申所へひきのせ、くひをきりてまいらせよとのせんじなりとて、はくこうと申するきをたまわりけり、さてもものふは、せんさいわうの内裏へまいり申けるは、いかにきさきこしめせ、すてに大わうのふすまのせんしにて候、あはれいてく此たいりを出させ給ふと申ければ、きさき此よしきこしめし、これはゆ(二二ウ)めかや、うつゝかや、なにとなりゆく世の中そやと、かなしひおはしませは、ものふとも、しこくをうつし候ましとて、すてに大ゆかにあかり、にしきのしとねをふまんとす、きさきのおほせに、いかにたしかにうけたまはれ、我こそくはほうつたなき身なりとも、きのふまで一天の君のすませ給ひし玉のゆかをば、なんちらはいかてかけかすへき(二三オ)とて、十二ひとへにくれないのはかまのそばをとり、こんていのほけきやう五のまきはんくはんばかり、よみかけ、御手にもち給ひて出させ給ふ、十五夜の山のはを出給ふことくなり、まことにあたりもかゝやくはかりなり、さてもひすいのかんざし、玉のすたれにかゝりてひかへにけり、はつし給ふと、なみたのしたより

としころはよそにおもひし玉すたれな(二三ウ)にをしひてわれをとふらん

とあそはし給ひけり、ものふなせなくもはしりより、大ゆかより引おとしたてまつる、十二ひとへはきと奉り、あさのころも身をやつし、御くしを手にからまき、ちうにさけてゆきければ、あまりのことにたへかねて、せめてかみをゆるせとありければ、その時ものふとも、しやけんつちをひたて、あゆ(二四オ)ませ奉り、御あしよりちなかれ、あとはさなからくれないの色にそなりにける

くれなるの雲になりぬるわ身かな たなひくそらのかすみならねはかやうにあそはし、たゝをなしくは、こゝにてうしなひ候へとて、こゑをあけてさけひ給へは、その中に心あるものふのありて、まきのと申ところへ、あやしのむまを引よせ、ゆひくらをして(二四ウ)のせたてまつりゆくほとに、廿日ちと申みちなれとも、三十日と申には、をとに

ふこれを見まいらせて、さすかいは木の身ならねは、をのくゝなみたをなかし、袖をしほらぬ者なし、さても御くしな^{セツ}つにゆひわけて、ひとふさのわをばばんでんたいしやくにたてまつる、わうし三さいにならせたまはんまで、ことゆへなくまもりたまへと、一寸のかみをはけんらう地神に奉る、一寸のをは此山のしゆこ神ちらわち(二七ウ)にたてまつる、一寸をはりうくしやうへたむけたてまつる、一はらをはゑんまわうきしんに奉る、一はらをはちゝはゝにたむけ奉る、一ふさはは此山中のこらうやかにほとこす、かやうにいろゝたむけ給ふて、みきの御手にわうしをいたき、左の御手にてしやくまくのいはをさゝへて

みなしごをそたつるやまのたつたひめ 秋のこのはもあらくちらすなと(二八オ)あそはして、かうしやうにねんぶつ十へんばかりとなへて、いまははやおもふもくるし、とくゝとありければ、ものふつるきをぬきて、御うしろにたちよれば、御くひはまへのいはほによりかゝり、わうしをいたきてふします、ころは三月十五日、むまのときとかや、此ありさまを、ものふ見まいらせ、こうくはいして、いはのうへにたをれふし、こゑも(二八ウ)おしますさけひける

六人のものふ、五人はもとゝりをきりて、そのまゝしゆきやうにいでける、一人は御くひをもちて、もとのわうぐうへかへりけるとて、みちすから、こゝにては何とおほせられつる物を、かしこにてはかやうにおほせられつる物をとて、なくゝもとのわうぐうへかへりければ、きさきたち、御くひをうけとり、なめならざるこひて、此くひをは(二九オ)さうはのなみのふみいたのしたに、うつむへきよしたため給ふ、その中に一人のきさき、せんさいわうのはゝところの給ひけるは、いまははや、思ひのまゝにさしなひ給ひつるうへは、なにかくるしかるへき、此くびをみつからに給り候へとありければ、此きさきにわたされける、きさきうけとり給て、みなみの花そのに、るりの手はこにおさめ、六まん(二九ウ)べんのねんぶつを申、あし引のみやのためにとふらひ給ふそあはれなり、さても大わうには、かのあしみやはあか山か子をうみ給

きくからひくせん、きんたうかみねより、しやくまくのいはの上にそつき給ふ、やかてひきのせたてまつり、ささてにしにむかはせまいらせで、すてに御くびをうちまいらせんとしけるところに、つるきたんゝにけれは、きさきおほせられけるは、やあいかになんちらうけたまはれ、せんさいわうの(二五オ)きさきとなりまいらせ、さいしやうこくにて三とせ、とうしやうこくにて一とせなれば、いまはなにをかつゝむへき、身もたゝならすなりてなゝ月にはやなり、すてに一てんの君たいないにやとらせ給へは、いかてか我くひよもきれし、しはしたちのき候へとありければ、ものふ、こゝやかしこにしのひけり

そのとき、后たにないにまします御子に、おほせらるゝやう、いかにきこしめし候、く(二五ウ)わうそんは七月になれば、はゝのうちにてみゝをきくと申事の、よもいつはりにて候はし、かほとくはほうなき、みつからかはらにやとりたまはんより、いそきむまれ給ふへ、ものふの手にかゝり、うせなんとありければ、やかてむまれたまふ、御らんすは、まことにあたりもかゝやくはかりなる、わうじにてわたらせ給ふは、なかゝゝいましほの御おもひまし給ふ、なけきかなしひ給ふ事かきり(二六オ)なし、さてもものふをめしよせ、いかにうけたまはれ、あのにゝをとする水をむすひてまいらせよ、わうじにもうぶゆひかせまいらせ、我もさいこの水のまんとおほせければ、ものふ申けるは、あの水をとちかくきこゆれとも、三里のほかの水なり、かない候ましと申、又その中になさけあるものふ申けるは、しはし御まち候へ、水とりてまいらせんと、はるかたにゝおりたり、(二六ウ)きたるかふとのにはに水をくみたてまつる、きさきよろこひ給ふて、わうじにもうぶゆひかせまいらせ、我も御さいこの水をきこしめされ、そのゝち、いかにやわうじきこしめせ、みやこにてむまれたまはゝ、なゝへのびやうぶ、やへのきちやうのうちに、にしきのしとねのうへにして、あかめ奉るへき御身なれとも、此いはのうへにて、かゝるうきめを見給ふむまれ給ふこそ(二七オ)ふしきなれと、かきくときなけきたまふ、ものゝ

ふとて、なんざむをやらせ給ひて、しなせ給ふとそ申きかせ奉る

さるほとにからひくさんのわうじ、御くびなきはゝのちふさにそひをはしませは、御くびのきれめより、てんのかんろながれくたり、すなはちかんろとなるを(三〇オ)きこしめしてそおはします、さてもこのきさきのしかひにつみて、こらうやかんのゝあつまりて、ぶくせんとするそのとき、山のしゆごしんきたりたまひて、いかになさけもしらぬこらうやかんなり、くはしくうけたまはれ、しにんすでに女ほうの一大事とするかみを七つにわけて、上はほんでんたい尺、以下はなんぢらまてほどこし、わうじをまもれと(三〇ウ)ちかはせたまふことをばしらずや、なんぢら、むなしきからだを、まもり奉れとおせければ、さてはとて、それよりしてかのむなしきからだをまもり奉りけり、さてわうじ五さいと申秋のころ、五たいみたれ、ほねもくつれけり、わうしいかゝせんとなけき給へは、此きさきのうせ給ひしあとより、萱草といふくさおひてけり、わうじこれ(三一オ)をとりにてきこしめし、八さいまですぎ給ふところに、此山のかせき、こらうやかんあつまりて、いろゝのはなをとりてまいらせ、秋はこのみをひろひて、わうしにまいらせ、さむきときは木のみをあつめて、その中にをきまいらせてあたゝめ奉り、わうじあけくれ見給ふものとは、よろつのかせぎはかりなり、されは我ちゝはゝかとおほしめし、こらうやかん(三一ウ)をとみなひて、たにゝみねゝへ、かせきのあし手にもつれ、あそひ給ひけるこそあはれなり、さてこころうやかんの申ことをもきゝり、給ふぬころはかな月、十日あまりの事なるに、そらかきくもり、よもの山やうゝしくれわたり、物さひしかりけるおりふし、からすとびきたり、木のえたにとまり、大きなるはうへにとまり、ちいさきをは中にをひて、ちゝよはゝよ(三二オ)と申をきこしめし、なみたをなかし、なにかは我もちゝよはゝよと申さんと、なけきかなしひ給ふ、その夜のゆめに、母みや見え給ふやう、いかにやわうし、ふかくなけき給ひそとよ、我しらほねを此いはのしたによくとりをさめ給ふへし、きうかさん

ふくのあつき日は、すゝしき風となり、けんとうそせつのさむき日は、かせふくかたのかきとなり、御身のかけにたちそひてまもるへし

しからは(三二ウ)わうし十二さいと申さん秋のころ、とうしやう国よ
りち、せんさいわう、此山へたつねてきたり給ふへし、いかなるものそ
ととひたまは、ちゝをばとうしやうこくのせんさいわう、はゝをはさ
いしやう国のあしひきのみやと申候が、千人の后にくまれ給ひて、む
しつのかにしみ給ひ、我を、なな月と申に、此山にてうみをき給ふ
て、ここにてものゝふの手にかかり、くひをきられ給ひ(三三オ)て、
すてに五年はむなしきしきいをたのみまいらせ、そのゝちはかせきのな
さけにやしなはれ、すてにこしは十二さいになると申へし、又我かこ
ひしくは、あけくれはさいはうしやうどにまします、なむあみだふつと
なへ奉るへしとをしへ給ふば、をしへのまゝに、あけくれははゝの恋し
さに、かうしやうねんふつをあさゆふ申させ給ふ、さて此ゆめにて十二
ねんをすこし(三三ウ)たまふ

そも〱十二年と申秋のころ、せんさいわう、きまんこくよりかのくす
りをとり給ふて、くわんぎよならせましますみちすから、きさきの御事
おほしめしけり、さても月日のかすに、千人のきさきたちに、かのくす
りをまいらせ給ひけり、さてそのゝち大わうに申給ふ、われすてにせん
しにしたかつて、きまんこくへおもむき、ふねのうへなんふう、あらし
なみかせに、めいをうしない申(三四オ)さんとする事度々にあり、し
かれともうんめいにまかせ、六ねんにゆきつく、をにと人も人をふくせん
とて、よろこひ申事かきりなし、あるひはくちよりひをはくおにもあ
り、あるいはくちより水を出すもあり、あるひはくちより大ふう、くわ
ゑんをふき出すおにもあり、又つるきをとす鬼もあり、はんしやくの
いはをくだす鬼もあり、そのかすをつくす事かきりなし(三四ウ)かく
のこくのだいありしかとも、仏神にいのりきせい申、ことゆへなく
六年にかへりまいりて候と申給ふ、ちゝ大わうおほしめしけるは、また
きさきのことをはしめされたたまはずや、かたらはやとおほしめしけ
れとも、あまりの御いたはしさに、とかくものをはおほふせられず、せ

うのすむところうけたまはり候へば、もしそのへんにてやうしなひ奉り
候らん、御たつねも候へと申されければ、せんさいわう、さては(三七
ウ)とて、たいりをたゝ一人、しのひ出させたまひて、をほくのなんじ
よをしのき給ふほとに、わうぐうにてきこしめしつるよりすくれ、日か
すやうやくつもれば、とあるにし木のしたに、その夜をやとします

しはしまとろみ給ふとしけるところに、くれなひのはかまにしろききぬ
ひきかつきたる女房の、つゆにうちしはれたるか、物おもふふせいに
て、うしろむきてたちたるを(三八オ)いかなる人やらんとて、うへ
のころもをひきのけ見給ふは、たつね奉るあし引のみやにてそおわしま
す、これはいかにやとて、我に物をおもはせ給ふそとて、うちうらみ給
へは、そのとききさきのおほせには、みつからは、御身ゆへに、ちゝは
ゝをふりすて、君はかりをたのみ奉るところに、なさけなくもすて給
ふ、けつく千人のきさきたちの、むしつをつみをいひつけて、もののふ
の手に(三八ウ)かゝり、此山にて十二ねんのあひたのくるしひをは、
いかてか五年十年にもかたりつくすへし、我たゝならすして、なゝ月に
なるとき、わうしたんしやうならせ給ふ、わうしは、此山の地神あはれ
ひ給ふて、ころうやかんにいたるまで、ちゝはゝのことくやしなひ、し
ゆこし侍るゆへに、わうじこの山にあり、御こゝろさしふかくは、わか
すかたをもとのことくに、いのり返らし見給へ、さてそれはいかにと
(三九オ)ありければ、我白骨をわうしにとひ給ひなは、いはのしたよ
り出すへし、それをもつて、これよりみなみ九十日にゆきてくにあり、
名をはかいらい国と申なり、すいひのむろといふなり、このいわやにま
します、ひしりの御名をふろう上人と申こそ、しゝたる人をもとのすか
たに、いのりかへし給ふへし、いまははやたいしやくのたつね候へん、
いとま申て、かきけすやうにうせ(三九ウ)給ふ
うちをとろき給ふは、ゆめなりけり、御手にあたる物とては、いはとに
し木そあたりける、いとゝせんかたなく、なみたにとこもうきぬへし、
かなしくおほしめしけるところに、かうしやうにねんぶつおさなきこゑ
にて申けるか、たかねにかすかにきこへければ、ふしきなり、かゝるお

いさいわうは、わがなけきをばつゆほともしろしめされず、大わうの十
二ねん(三五オ)のあひだに、くろかりし御くししろくならせ給ひける
事を見まいらせ、さてもとし月のかきりなる、いそきだいらへいらせ給
ふて見給ふへは、ちかく人すみたるけしきもなく、みすもきやうもや
ふれはて、のきもさゝかにのいとひきわたし、あめ風もたまらぬふせい
なり、ちやうてにおそれふして、これはいかにやとなけきかなしひ給ふ
ところに、としころめしつれたる女一人(三五ウ)御前に参り、たゝな
くよりほかのことはなし、せんさいわう、さてもいかに〱とたつね
給へは、さても君御出ののち、いくはとなくして、きさきはむしつのと
がをいひつけられ給ひて、ゆきかたしらす、うしなひ奉りけると、申せ
は、わうとかく物をはおほせられず、たゝせきめんの御なみたにむせひ
給ふ

さてもときはと申て、しやうらうのありけるか、見たてまつるもかなし
きと申、しうせんの御うへにもかゝる御なけきのましますよ、いかて
(三六オ)もたみにうれひのなからまし、せんさいわう、たゝきさきも
ろともに、ひとつみちとなけき給へは、あるしんか参りて申奉るは、め
いとにも六たうと申てみちあまたにわけられたり、いつれのみにか、
ゆかせたまふらん、おなしくはこんしやうにて、とんせうほたいを、一
すちに、ひとつはちすのゑんと、いのらせましますと、申とゝめ(三六
ウ)奉る、けに〱此君の御ゆくゑをきこしめしたくおほしめして、ゆふ
つけのうらなと、申事の候、きこしめし候へと申ければ、それはいかに
といふとやらんと、御たね候へは、せいりやうでんのひさしに、たちい
てまゝ〱て、つけのくしのはをひきならし、うらまさしかれ、ゆふく
れに、とあるやつまにたち給へば、しつのめきぬたうつとて

こひしくはにしをたつねよはつかちの(三七オ)かはねを見てそ子
にはあふなる

と申をきこしめし、たいりへかへらせ給ふ、さてもはつかちとわ、いつ
くなるらんと御たつねおはしませは、しんか申されけるは、これよりに
しに、はつかちゆきて、からひくせんと申山あり、これにはてんくまわ

そろしきところに、人間のものはやすむらん、さてもまわう、てんぐ
かとて、あくれはこゑにつ(四〇オ)ゐて、たつねのほらせ給ふ、とし
のほと七つ八つはかりのもの、かみはあかくこけむしたるものか、こら
うやかのあしにまきてにけのほりける、いかなるものぞ、ここに候
は、にんげんのものか、又てんくまわうか、しわしとゝまれ、物とはん
とおほせありければ、そのときたちとまり候はす、ちゝをはとうしやう
こくのせんさいわう、はゝをはさいしやうこくのあしひきのみや(四〇
ウ)と申候、せんさいわう、きまんこくへの御るすに、千人のきさきた
ちに、むしつのとかをいひつけられ、我をはらにもたせ給ふてなゝ月と
申に、ものゝふの手にかかり、此山にてうしなひ奉るとき、しはしもの
ゝふにいとまをこひ給ひて、我をうみ給ふひ、此ところに十二ねんの
あひだ、ころうやかんにやしなはれ、はるあきををくり候と申させ給
ふ、わうきこしめし、我そ(四一オ)なんちかちゝよ、せんさいわうな
れ、これへ参れとおほせらるれば、むまれてこのかた、にんげんのたぐ
いもしらす、けんふのにはひをもしろす、いかでかちゝと申ながら、十
せん王を上げがし申へきとありければ、たにゝくたらせ給ひて、そく
しんじやうふつの水にてわうじをすゝき、御ころもをきせ給ひて、御
くしをかきなて、御なみたにむせび、たへいり給ひふひぬ、(四一ウ)や
ゝしばしありて、かくかたみのありつることよとて、いにしへの御物か
たり、くはしくかたり給ひ、はゝのほねはいづくにあるそと、おほせら
れければ、あるいはのはさまへ、ゆひさし、とりいたし奉る、せんさい
わう、御はねを御らんし給ふひけるにつけても、つらさの御なみた、一
しほとまさりけり、さてきさき、ゆめのつけにまかせ、わうしを引ぐ
し、かひらい国へわたり、すいひのむろをた(四二オ)つねゆかせ給ふ
ほとに、九十日と申には、かいらい国、すいひのむろにつき給ふ

物申さんとありければ、たそや此いはやへきたるとは、にんげんのもの
のかよふところにてもなきにとて、たち出給ふを見給ふへは、かうのけ
ふりにふすほりて、ひたいに、しかいのなみをたゝみ給ふ、まゆには
しもをたれて、はくはつたるひしりたちいて、いかなる人ぞととひ給

ふ、我はこれ(四二ウ)とうしやうこくのあるしせんさいわうと申ものなり、つまのきさき、はかなくなり給ふをなげくところに、ゆめのつけにまかせ、此いはやへたつねまいりて候、もとのすかたにいのりかへし給へかしと申せと侍れば、つけにまかせて、たつね参りて候と申給へば、そのときひしりうちへいらせ給ひと、いはやへしやうし奉る、さていかほとなりたまふそとひ給へは、はや十二ねんになり候と(四三オ)申給ふ、さてはかなひ候まし、一とせ二とせの間はやすき事に候、せめて五年六年にてもあらはこそ、これははや十二ねんにて候は、おもいもよらずとそおほせありける、あまりに御なさけなしと、なけきあかし給へは、ひしりおほせけるは、たししのりかへし候とも、百三十日にはみたれ候あひた、おなじ御なけきに候とありければ、せんさいわうの給ふは、こひしき人をは、ゆめに(四三ウ)見てたになくさみ候、ましてや百三十日はなかしきりにて候と、よろこひ給ふ、さてしたる人の、一ねんなれは一七日いのり、又二年なれは二七日いのり候、これははや十二年に候へは、二百日いのり候へしとて、こかねのいたに、こかねのむしろのべしき、大なるほね、ちいさきほねをちらさすならへ給ふ、御くひのほねなかりけり、これはいかせんとなりければ、又ひじり(四四オ)わうじをうつくしくとりいのりなして、ひしりつるきをとり出し奉る、とうしやうこくへやり給ふ、わうぐうへゆきて、そぶのとうせんわうに此よしを一度申給ふ候へとも、ゆめにもしらすとおほせければ、おやのかたきの御事なれはとて、わうしつるきをぬひてふり給へば、千人のきさきのくひは、一どにはらりとをちけり、その中に一人のきさき、(四四ウ)御くひおちさせたまはず、これはすなはちせんさいわうの御は、なり、わうしにあひたまつて、くわしくたつね給へは、みなみのはなそのにをかせ給ふをとりだし、るりのてはこの中より、御くひのほねをとり出して、わうじにわたさせ給へは、御手をあはせおかみ給ふてうけとり、やかてかちらいこくへそとひたまふ、さても御ほねそろへならへ給ふ(四五オ)て、きぬひきかつけ、たんをこしらへ、かんたんをくだきていのり給ふは、日かすかさな

り給ふは、あまり御ゆかしさに、二百日にいのり給ふへきを、百九十日と申には、うへのきぬを引のけて見給へば、もとのすかたに、すかたに、すこしもかはりたまはずして、そんひんとして御くしは、かたのまはり、ほうくとおひかりたまふを、をしおこし奉り、ころは九月十四日の夜うしの(四五ウ)時とかや、さてもせんさいわう、なのめならすよろこひ給ふて、大わうきさきもろともに、いにしへの御物かたりともおはします、たかひに御なみたに、むせひて、そろにあはれにまさりける、さても大わうは、たきぎをよろひ給へは、きさきわうじは、たにの水をむすひて、御ひじりの御おんををくり給ふ
そのとき上人のたまふ、此国は(四六オ)ほんふのたやすくすむせかいにて候はすとて、じんつうのくるまに、のせたまつりをくり給ふへしとありければ、せんさい后よろこひ給ひ、御くるまにめされ、ひしりは御まほりより、三つのつるきとり出し、このつるきのと、まらんところに、すみかをさためたまへと、みなみへむかひてなけ給へは、ひとつはりうくうしやうにと、まり(四六ウ)、ひとつはしやあこくにと、まり、ひとつは雲のなみ、けふりのなみをわけ、いとふかきおんかのしまにと、まりけり、さてもとひくるましやからこくへとひ給ふ、あらためてたいりをつくりいれ奉り、しはしすませ給ふところに、せんさいわういかおほしめしけん、きさきの御いもうとおもひつき給ふて、もとのきさきの御事は、つきになし(四七オ)たまひけり、さてもきさきはこれをうらみひて、かゝるうきよにあればこそとて、又とひくるまにめしてとひ給ふほとに、たんしやう五ねんきのへさる、十二月十三日むまのこくに、日本あきつしま、いよのくに、いしつちのみねに、はしめておちつき給ふ、このみねには、つの、ごんけん、いはつかのごんげん、すみ給ふなれば、あるへからすとて、あきの国(四七ウ)、さゝいのこほり、かはいのむらといふところにおちつき給ふ
こゝに又なにはのきよのとき、はりまの国、いなみの野に、ひとつのしかあり、此しかのこゑをきく人、みな玉しるをけす、すいてんわうのちよくちやうとして、いかにしてもこのしかをとりてまいらすへきよ

し、せんしとくたし給ふ、かの国のしう人、さいきのくらもとにおほせくたされける、くらもと(四八オ)いんせんをうけ、これものをを、た、よのつねのゆみやにてはあらしとて、いつみの国の大とりのこほりへゆきて、こかねのゆみ、こかねのやをつくり、又この国へくたり、かのしかをねらふに、三日と申にかのしかをいとりて、ていわうにたてまつる、そのしかのけ、つねのしかにあら、月日のことくはしあさやかにして、けの色さなからこんしきなり、見るにお(四八ウ)おもてもかゝやくはかりなり、ていわうにこれをえいらんましまして、いんせんにかきのふ、むかしくしきのしかあり、すなはちこれきんしやなり、いきながらとりて参らせずして、こゝろす事もつたいなし、たとへはよのつねのしかなりとも、せつがいつみふかし、これはきんしやのてう、にちりんなり、きんしやをがいするは、大なるつみなるへしとて、くらもと(四九オ)を、あきのくにとすはうの国のさかひに、大たきといふところへながされけり

せめての事に、たかつりをして、おんかのしまにあさりをするところに、にしよりくれなゐのほかけたるふねきたる、ちかくなるを見れば、きんきんなり、とまのうちにほこをたて、あかきへいをそつたりける、そのとき見れば、とまのうちに、まことに(四九ウ)けたかきびちよ一人ましますと申ければ、びじんこたへてのたまふはく、我はこれ、なんてんちく、さいしやうこくの、てんにちわうのひめみやなり、日本あきのくにきたる事は、已しやうにちかつき、しゆしやうをよとせんがためなり、われすてにうゑにのそめり、はやくこをまいらせよとありければ、くらもと、なにをまいらすへきと申せば、うしほにて(五〇オ)よねをあらいてまいらせよとおほせけり、さらはとてくろますのしまにふねをよせ、おかしはをとりてまいりて、そのかずいかにと申せば、大宮は、ひたりは三つ、みきは九つ、なかは十六とおほせけり、さてはとて、くろますしまのていを御らんし、てんちくのおかのしまにさもにたりとて、たきのかう、三ちのくのはまにあとをたれ給ひ、御ほふてん、(五〇ウ)ならひに、百八十けんのくはいらうをたて給ふ、い

まだこれほとんしを見すとて、うつくしきしまとおほせあるによつて、いつくしまとは、それより申はしめけり
御たくせんにより、まつかりとのをはしめてたていれ奉る、大こんげんと申なり、あしひきのみやの御事なり、御ほんちはたいさうかいのたいにち、又あとよりせんさいわう(五一オ)たつねさせ給ひていらせ給へは、まれ人の御いり候とおほせあるによりて、まらうのごぜんとは申なり、せんさいわうの事なり、御ほんちは、ひしやもんでんにまします、たきの御せんと申奉るは、からひくせんのわうじの御事なり、御ほんちはくわんおんにておはします、ひちりの御せんと申は、かひらいこくの上人の御事なり、ほんちは、ふとうみやうわうなり、あらゑびすと(五一ウ)申は、しまのあんしや申たるくらもとの事也、はやたちの御せんとは、さいしやうこくの御文もちて、つかひ申たる五てうの事なり、かりのみやと申は、千人のきさきの中に、なさけあるきさき、せんさいわうのは、きさきの御事なり

さても御まつりことを、三月十五日、九月十四日にさため、ほうゑをたて給ふ事そのいはれなり、御くひのきれさせ給ひし(五二オ)日は三月十五日、又かひらいこくにていのりかへし給ふ日は、九月十四日なりければ、それによりてこそ、二きのほうゑを御ついせんとは申なれ、六月十七夜のくわんげんをおこなひ給ふは、とうしやうこくにて、せんさいわう、恋におもれ給ふしとき、なくさめ奉るいはれとかや、いつくしまに、しかをちかつけ給ふ事、からひくせんにて、十二ねんのあひたわうしをやしなひ、しゆこし奉る(五二ウ)ゆへに、御むつまじくおほしめして、かせきをちかつけ給ふなり、大千人のみなしごをさいとせんと御くわんなり、されは、しゝたる人をいのりかへしては、百三十日にみたと申せとも、五年と申五月五日むたのこくに、さゝいのこほり、かはゐのむらにて、五たいみたし給ふなり、それによりて、ちのこせんの御まつりは、五月にあり、さんのいみは七十五日、しゝての(五三オ)いみは百日とさため給ふいはれなり、しかをがいせんものは、ほた

此しま三へんほうしゆのち、おんしやうこくのまへなり、三けんゆとの、によくわうみやう、さくもくをいたゞき、はんがくちやうぢうの月、なみまのあひたにかけをうかへ、大じたいひの水は、八方のたにみつ、たきのみやのいぬるのすみちかければ、しゆふくのたつみといへり、くわんけんとうの三ふつなり、(五三ウ)そのとき、しんこんをこうけとて、つねに此しまにきたるなりとて、三けんのはやこれあり、ひししやなのおこなひをたつし給ひし、たうちやうなり、なんてんのせんくのすみのかたち也

三しゆのほたいをたすけ、三みつのほうを、うけたまはりて、きひのおもひをなして、そのをしほり申さく、われらいやしき事をは、いかて天上にそうもん申候らん、いかゝなるへしと(五四オ)申されければ、御たくせんに、わうしやうのうしとらのすみに、きやくしん、ほし出給ふへし、たつねおとろきあやしめ給ふへし、そのいんせんに、此よしそうもん申へき、そのとき五でうおほくあつまりて、さか木のえたをくはへて、みやこへあつむへしと、御たくせんあるによつて、くらもとわうしやうへのほり、此よしそうもん申、おなしくからず、さか木のえだを(五四ウ)くはへて、おほくたいりへ参る、又かれか申とくに、てんへのほしいて給ふば、くきやう大きにおとろきまします

さまくの御いのり(五)うあるに、くらもとをはうちうへんになさるゝ、御くうてん百八十ちやうの、御しゆりのそまいとて、御きしんのせんし、たうねん十二月廿一日、御ほうせんに、おさめ奉りて、明年の二月はつつさる、ほうゑのさくじをはしめ、さか木を(五五オ)とひら木として、からすをししやと、さため給ふなり、かのすいてんわうのせんしのしやうにいはいく

あきの国いつくしま大みやうしん、御くうてん百八十ちやう、いまよりのちたうこくは、八人のしそん、さらくかみのくらゐをはゝからしめ、しやけをわつらはさず、これすへからくまつたいにをよんで、御やしろはいてんとうのときは、(五五ウ)たうこくのこくし、くはんそうをへて、こくちうひきはたをかさねて、みやこへはんそうすへからず、ほ

んちんあらためん時は、しんくをつくして、百日百夜けつさいして、にしきをもつてをまき、そのうへをにしきにてつゝみ、おもてをかくし、せんめをたきて、百にちのあひたにちくきこしときをのそひて、よくく五かいをたもつて、つつしんで御た(五六オ)くせんにしたかつて、しやうしんをつとめはいし奉るへきのみ、くたんのことし

延生五年きのへ十二月廿三日 右中弁納

あきのくに、いつくしまの大明神、御ほうせんにおさめ奉る

されは大明神のちかはせ給ふは、我をねんするしゆしやうは、かうせんのかつき、しそんはんしやう、うたかひあるへからず、もしもふしんのしゆしやうは、しそんかならず(五六ウ)あとたえ、その身すなはちあしくなるへしと、ちかはせまします、しやうしんのへんさいてんとけんし給ふひ、一さいしゆしやう、しよくわんなんそまんそくせざらんや、しよふつしひのほんちなれば、くわんおんの大じたいひの御せいぐわんにそ、よにすくれまします、あくまをはらひ、しよぶつをあかめ、ふくてんすくれたとて、いつくしまの大明神とあらはれ(五七オ)給ふなり、此はんちことによみ、人にほとこせは、十度御前へさんけいしたまふよりも、ほうけん二ねん三月十六日に、たいらの朝臣きよもり、いつくしまのみやつくりおほしめしたつ、ころはちこくはんねんに、此えんきをほうせんにおさめ給ふなり、かならずひすへし(五七ウ)

研究室メンバー（昭和52年度）

参 与 室 長	地理学教授	石 田 寛 (47. 4. 1 委嘱)
同 上	考古学助教授	潮 見 浩 (同 上)
同 上	考古学助手	川 越 哲 志 (同 上)
同 上	国史学教授	松 岡 久 人 (同 上)
同 上	国史学助教授	坂 本 賞 三 (同 上)
同 上	国語学国文学教授	磯 貝 英 夫 (同 上)
同 上	国語学国文学助教授	室 山 敏 昭 (50. 4. 1 委嘱)
同 上	地理学助教授	森 川 洋 (47. 4. 1 委嘱)
同 上	事務長	平 井 茂 (52. 4. 1 委嘱)
研究員	国史学教授	河 合 正 治 (47. 4. 1 委嘱)
同 上	国史学教授	松 岡 久 人 (同 上)
同 上	国史学助教授	坂 本 賞 三 (同 上)
同 上	国史学助教授	有 元 正 雄 (50. 4. 1 委嘱)
同 上	国史学助手	錦 織 勤 (52. 4. 1 委嘱)
同 上	地理学教授	石 田 寛 (47. 4. 1 委嘱)
同 上	地理学助教授	森 川 洋 (同 上)
同 上	地理学教授 (総合科学部)	藤 原 健 蔵 (48. 4. 1 委嘱)
同 上	地理学助教授 (東雲分校)	北 川 建 次 (47. 4. 1 委嘱)
同 上	地理学助教授 (総合科学部)	村 上 誠 (48. 4. 1 委嘱)
同 上	地理学助手	成 瀬 敏 郎 (同 上)
同 上	地理学助手 (総合科学部)	堤 正 信 (50. 4. 1 委嘱)
同 上	考古学助教授	潮 見 浩 (47. 4. 1 委嘱)
同 上	考古学助手	川 越 哲 志 (同 上)
同 上	考古学助手	河 瀬 正 利 (50. 4. 16 委嘱)
同 上	国語学国文学教授	小 林 芳 規 (47. 4. 1 委嘱)
同 上	国語学国文学教授	稲 賀 敬 二 (同 上)
同 上	国語学国文学教授	磯 貝 英 夫 (同 上)
同 上	国語学国文学助教授	米 谷 巖 (同 上)
同 上	国語学国文学助教授	室 山 敏 昭 (50. 4. 1 委嘱)
同 上	国語学国文学講師	位 藤 邦 生 (51. 4. 1 委嘱)
同 上	国語学国文学助手	三 保 忠 夫 (50. 4. 1 委嘱)
同 上	国語学国文学助手	小 林 美和子 (51. 4. 1 委嘱)
同 上	国語学国文学助手	菅 原 範 夫 (52. 5. 1 委嘱)
同 上	国語学国文学名誉教授	藤 原 与 一 (47. 12. 20 委嘱)

昭和53年 3 月25日 印刷

(非売品)

昭和53年 3 月31日 発行

編集兼発行者

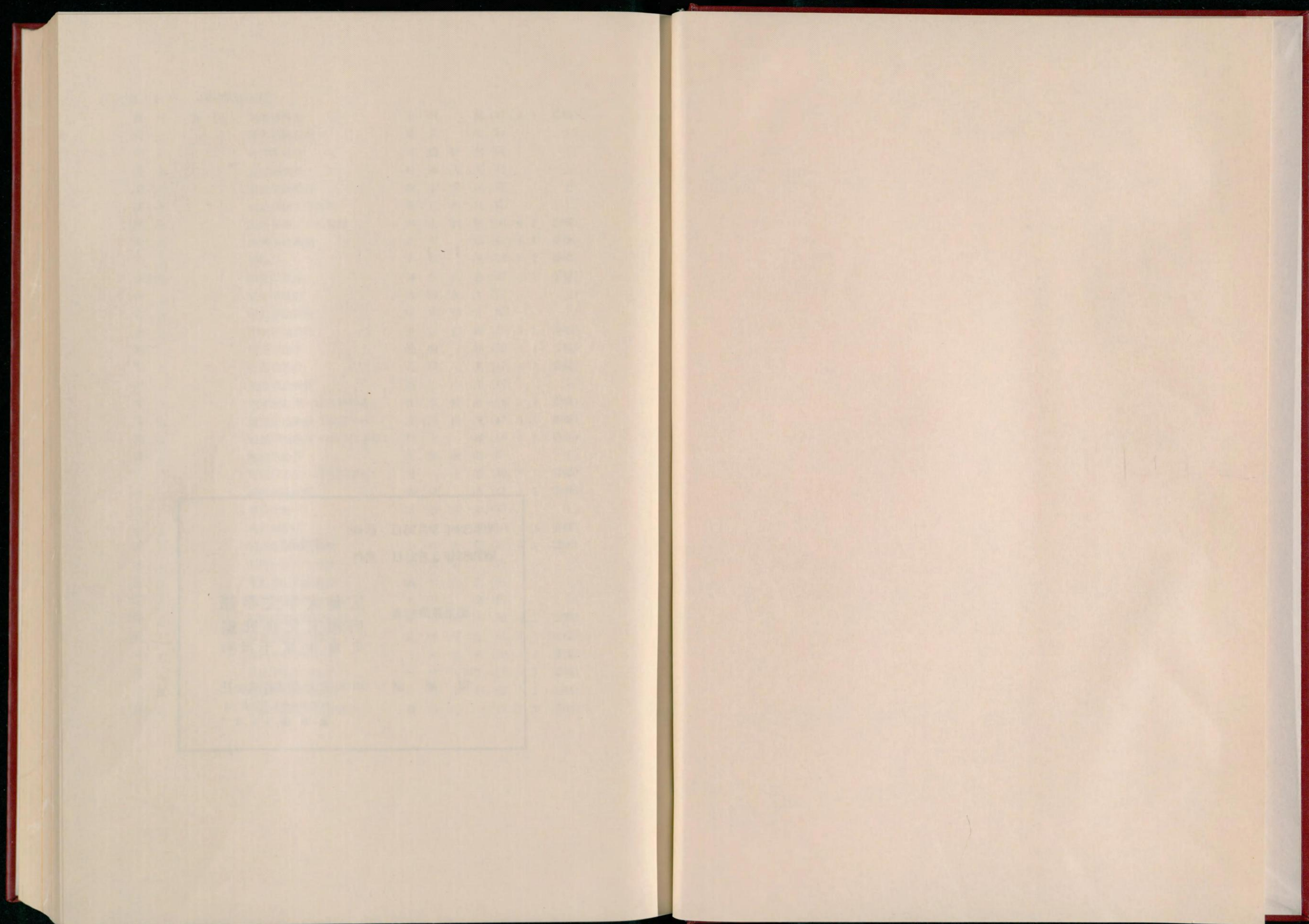
広島大学文学部
内海文化研究室
広島市東千田町

印刷者

中本総合印刷株式会社

広島市大州5丁目1-1

電話 ⑧ 4 2 2 1



Bulletin of the Institute for Cultural
Studies of the Seto Inland Sea
No. 6

Contents

Bibliography and Source Materials

1. History (Bibliography) 1
2. Japanese Language and Literature (Source Materials)59
 - (1) The Dialect of Uama Hamlet, Nakajima Town in the Nakajima Islands.....61
 - (2) Reprint of Two Accounts of *The Legend of Itsukushima*
with Bibliographical Introduction13

Field Investigation

- Geography87
- Japanese Language and Literature95
- History 3

The Institute for Cultural Studies
of the Seto Inland Sea

University of Hiroshima

Faculty of Literature

1978

82
85